

一九五〇年代における章乃器の言論活動とその挫折

——「百花斉放・百家争鳴」から「反右派闘争」へ——

水 羽 信 男

一 問題の所在

「百花斉放・百家争鳴」（「鳴放」）期とは前年以來の中共の提唱を受け、一九五七年に入り出現した言論の解放の一時期である。当初中共は「言者無罪」を繰り返し強調し、中共に批判的な見解に対しても直接反論は行わなかった。そのこともあって、民主諸党派に所属した知識人の多くは、このキヤンペーンを自らの政治要求を提示する好機と捉え活発な言論活動を展開した。しかしながら、五七年六月以降、中共は一転して、中共批判を展開した知識人に対して「右派分子」とのレッテルを貼り弾圧した。この「反右派闘争」の結果、各民主諸党派は従来以上に中共の一元的支配のもとに置かれることになった。こうして、中共の政策をチェックする政治勢力は圧殺され、中華人民共和国は「大躍進」・「プロレタ

リア文化大革命」（文革）へ突入していった。

つまり、「鳴放」から「反右派闘争」へと至るプロセスは、中共に対する批判が建国後はじめて体系的に現れた時期であると同時に、その要求活動が挫折した過程であり、この過程を分析することにより、中国現代史（一九四九年～）の特質の一端が鮮明に浮かび上がる。したがって、この時期に関しては数多くの研究が発表されてきたが、従来の研究史においては、なぜ中共が「鳴放」から「反右派闘争」へと政策を転換したかが主要な研究課題となり、民主人士に即して、この時期の言論活動の特徴を解明した研究は少なかった。民主人士に注目した場合でも、主要な問題関心は知識人の政治改革要求の分析にあつた。⁽¹⁾そこで、拙稿では商工業者に関して発言を行った章乃器を取り上げ、「鳴放」から「反右派闘争」へ至る彼の言論活動の特質の一端に迫りたい。

章乃器（一八九七～一九七七年）は浙江省に生まれ、一九

三六年には鄒韜奮らとともに全国各界救国連合会（全救連）を設立し、活発に抗日運動に従事した。それゆえに浙江省実業銀行副頭取の地位を失うだけでなく、全救連の他の指導的メンバーとともに南京国民政府により逮捕・投獄された（抗日七君子事件）。しかしながら、四一年には全救連から離脱して中共に対する独自性を喪失していく他の救国会系知識人と一線を画し、その一方で上川実業公司等を設立し、活動の重点を経済活動へ移した。

一九四五年、抗戦勝利後には黄炎培らとともに、民族ブルジョワジーの政治団体と言われる中国民主建国会（民建）を設立し、中華人民共和国の成立に参画した。その功績により彼は、政治的に重要な役職につき、五七年に「鳴放」が始まった時期には、中華全国工商業連合会（工商联）副主任委員・民建副主任委員・全国人民代表大会四川省代表・政治協商会議全国委員会委員・國務院糧食部部长などに任じ、代表的な民主人士の一人であった。しかしながら、彼は「鳴放」期に中国人の私的資本家（以下「民族資本家」と表記。ただし「」は省略）について積極的に発言し、そのために資本主義を復活しようとした「右派分子」として断罪され、政治生命を断たれた。²⁾

「鳴放」期の章乃器の発言の背景にあった民族資本家に対する社会主義改造は、次のような過程で進んだ。³⁾

〈第一期：一九四九〜五二年、民族資本家の存立基盤の動揺〉

建国直前に発表された「中国人民政治協商会共同綱領」（「共同綱領」）において、民族ブルジョワジーは人民民主統一戦線の一構成要素として位置づけられていたが、五一年末から翌年夏にかけて大衆運動の様相を呈して展開された「三反五反運動」の結果、中共と労働組合が民族資本の経営権を事実上掌握し、民主建国会の幹部も一部交代した。さらに商工業者を再編成するため工商联が組織されることになった。

思想的にも五一年五月の「武訓伝」批判をはじめりとして、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想による思想改造運動が進められ、民族資本家の存立基盤は五二年末までに大きく揺らいだ。

〈第二期：一九五三〜五六年（社会主義改造の基本的完了）〉
五三年に提起された「過渡期における総路線」は、土地革命後の中国社会の主要矛盾を「労働者階級と民族ブルジョワ階級との矛盾」と捉えており、「共同綱領」で示した社会主義改造を遠い将来に展望する建国構想を放棄した。³⁾
この年、政府は第一次五カ年計画をスタートさせたが、以後、民族資本家に対しては、国家資本主義的政策に適應するだけではなく、本格的に社会主義改造に公私合営への道を歩むことが定められた。

五五年後半からは社会主義改造が一気に加速され、全業種にわたる合営化が目指されて小規模の工場や商店にも改造が及び、五六年には社会主義改造が一応完了した。この

過程で、従来の「四馬分肥」と言われる利潤分配原則——国家・企業・労働者・資本家がそれぞれ四分の一ずつの利潤を得る原則——に替わって、新たに「定息」方式（商業者が資本額の5%を毎年定額利息として受け取る方式）が採用された。李維漢は公私合営と「定息」の意義を次のように指摘している。

この二つのもの（「公私合営」と「定息」）は、資本家に三つの権利を失わせた。すなわち、一つは企業の生産手段に対する支配権であり、……それを失うことにより資本家は企業管理権を失い、それゆえ利潤の取得権も失った。

……このようにすれば、資本主義所有制の残滓は多くはなく、残滓はただ「定息」のみで、賃金を上昇させて企業の買い取りとする。⁶

以上のように、「鳴放」直前の時期にすでに民族資本家の経済的諸権利は、基本的には失われていたと言えるが、冷戦構造の下に置かれた上に、ソ連との利害の相違を意識しはじめ、独力による社会主義建設の必要を痛感していた中共は、知識人や商業業者などを動員するため、五六年一月に「知識分子問題」に関する討議のための会議を招集し、五月には、「百花齊放・百家争鳴」の必要を提起するに至った。

さらに五六年九月の中共第八回大会で採択された「政治報告についての決議」では「人民が経済、文化の急速な発展を

求めているのに、当面の経済、文化が人民の要求を満たさない状況にあ」り、今後の闘争の任務は「社会の生産力の順調な発展を守る」ことであるとされた。⁷

殊に、民族資本家に担われた「軽工業部門の多くは（第一次五カ年計画の達成目標を）未達成であり」、「これが都市における消費物資不足等の問題をひきおこしていた」のである。⁸ 因みに、建国当初の資本主義軽工業の生活物資の生産額は、綿布の四〇・三%、綿糸の四六・七%、紙製品の六三・四%、マッチの八〇・六%、ゴム靴の七〇%、メリケン粉の七九・四%、巻煙草の八〇・四%、という圧倒的な比率を占めていた。⁹ まさに中国社会の「経済的・客観的な現実」はなお資本主義経済との共存を必要としていた¹⁰ のであった。社会主義改造とはこれらの企業に対する統制であり、その統制の可否が、たちまち生産量の増減に関連することは間違いない事実であった。

こうした現実とは、章乃器にとって、民族資本家の経済活動の活性化を進める必要性を痛感させたと思われる。また、中共は、社会主義改造が基本的に完了したという情勢認識を前提にし、第八回大会では「わが国のプロレタリア階級とブルジョア階級のあいだの矛盾が基本的に解決し」たと述べ、*「総路線」*における「労働者階級と民族ブルジョワ階級との矛盾」が中国社会の主要矛盾であるとする認識を改めた。¹¹ 「主要矛盾」が転化したとの情況認識は、民族資本家の活性化を主張しようとする章乃器にとって有利なものだった。

しかしながら、五一年の思想改造運動、さらには五四年一月に発動されたブルジョワ観念論批判・五五年五月の胡風批判などで、中共の思想政策に不安・不信感を抱く知識人や中共の支配下におかれた商工業者はなかなか活発な発言を展開せず、五七年の五月に入り漸く「鳴放」は本格化した。

註1) 「百花斉放・百家争鳴」から「反右派闘争」にいたる過程に関する日本側の研究としては、内閣官房内閣調査室編「中共人民内部の矛盾と整風運動」(大蔵省出版局、一九五七年)、中嶋嶺雄「増補現代中国論」(青木書店、一九七一年)、平野正「中国革命の知識人」(日中出版社、一九七七年)、土屋英雄「中国「反右派闘争」研究序説」(「中国研究月報」四一八号、一九八二年)、田中祥之「一九五〇年代中国における社会主義と自由——百家争鳴から反右派へ——」(「季刊中国」13号(一九八八年夏号))などがある。中国側研究としては以下のものがある。于光遠「双百方針提出三十周年」(「人民日報」一九八六年五月一六日、羅竹風「『百花斉放、百家争鳴』的三十年」(「社会科学」一九八六年五期)、劉振義「反右派闘争嚴重擴大化原因初探」(「淮化煤師院学報(社科版)」一九八六年四期)、「復印報刊資料中国現代史」一九八七年二期)、石仲泉「関于一九五六一九五七年春天的思想解放大潮」(「新長征」一九八九年一期)、「復印報刊資料中国現代史」一九八九年三期)、胡連生「『反右派闘争』新析」(「社会主義研究」一九八九年三期)、「復印報刊資料中国現代史」一九八九年一期)。

なお、欧米の研究としては、Roderick MacFarquhar with an Epilogue by G. F. Hudson, *The Hundred Flowers Campaign and the Chinese Intellectuals*, Stevens & Sons Limited, London, 1960, などがある。

(2) 章乃器の経歴については、主として章乃器「我和救国会」(周天度編「救国会」中国社会科学出版社、一九八一年)、胡子嬰「我所知道的章乃器」(「文史資料」八二輯、一九八二年)、章立凡「先父章乃器往事見聞録」(「人物」一九八四年四期)、『*Biographical dictionary of Republican China*, vol. 1, Columbia Univ. Press, 1967 を参照した。

(3) 以下の叙述では、次の研究を参照した。姫田光義ほか「中国近現代史」下巻(東京大学出版会、一九八二年)、宇野重昭ほか「現代中国の歴史」(有斐閣、一九八六年)、山内一男責任編集「中国経済の転換」(岩波講座 現代中国)二巻、岩波書店、一九九〇年)、趙德馨主編「中華人民共和国経済專題大事記」(河南人民出版社、一九八九年)、趙德馨主編「中華人民共和国経済史」(河南人民出版社、一九八九年)など。

(4) 「中国人民政治協商会議共同綱領」(日本国際問題研究所・中国部会編「新中国資料集成」二巻、日本国際問題研究所、一九六四年)。

(5) 毛沢東「労働者階級とブルジョア階級との矛盾は国内における主要な矛盾である」(一九五二年六月)、「毛沢東選集」五巻、外文出版社、一九七七年)を参照のこと。

(6) 李維漢「在全国統戰工作會議上関于一九五六年到一九六二年統一戦線工作方針(草案)的發言」(一九五六年二月

二八日）。なお、この文献のオリジナルは「李維漢選集」（人民出版社、一九八七年）に収録されていないため、叢進「我國民衆資産階級何時消滅問題之我見」（『党史研究』一九八二年四期）における引用を使用した。

(7) 「中国共産党第八回全国代表大会文献集」一卷（外文出版社、一九五六年）。

(8) 前掲「中国近現代史」下巻、五八〇頁。

(9) 朱永馨「関于我国建国初期的社会性質」（『青海師專学报』一九八二年一期）（『復印報刊資料中国現代史』一九八二年一六期）。

(10) 前掲「中国近現代史」下巻、五六二頁。

(11) (7)に同じ。

二 民族資本家の在り方をめぐる

章乃器の言論活動

工商連は、一九五七年五月一日、北京・天津・上海などの代表者を招集し、北京で座談会を開催した。ここで、章乃器は「意見を提出するのに逡巡してはいけないうし、遠慮してはならない。また、「ブルジョワ分子との」帽子をかぶせられるのを恐れはならず、打撃を受け報復されるのを恐れてはいけない」と述べ、大胆な言論活動の展開を呼びかけた。また、「大公報」も同日「商工業者の大胆な「争鳴」を歓迎する」と題する社説で「各人はみな自分の意見を述べる権利がある」と強調した。

中共中央統一戦線部は第八弁公室と合同主催で五月一日以後連続して工商界との座談会を開催し、六月八日に終了するまで一九回にわたる会議をおこなった。また、民建は五月二〇日に全国商工業改造輔導工作第一回座談会を招集し、六月一〇日に終了するまで二五回開催したと言われる²⁾。

これらの座談会や新聞・雑誌を通じて様々な見解が出され、厳しい中共批判も展開されたが、章乃器は商工業者の経済活動の活性化の必要を強調して、次のように述べた。

われわれはあらゆる手立てを用いて商工業者の積極性を發揮させなければならない。こうして民族ブルジョワが損害を受けない過程において、国民経済と工・農業生産に有利であり、社会主義建設にも有利である³⁾。

当時の章乃器の最大の目標は、社会主義中国を富強化することであり、目前の情況から言えば、社会主義改造によって民族資本家の生産意欲を減退させてはいけないということであった。

それでは、当時、何が民族資本家の経済活動を阻害しているかと捉えられていたのであろうか。「放鳴」期に現れた言論活動から、この点を探ってみよう。

内蒙古工商連秘書長・鄭允命は「私が見るところでは、企業内には民主的な管理、民主的な制度、特に資本家側の有職・有責・有権（＝工場経営に関わる重要なポストに就くだけでなく、そのポストに相応しい責任と権限を持つこと）が保

障されてい⁴ない」と述べたが、民族資本家の「有職無權」という状態は、「共産党の代表が工場にくると生産、財務、人事を一手に握る」ためであつた。⁵「鳴放」期の民族資本家の中心的要求の一つは、企業経営への参画を保障・拡大することにあつた。

こうした要求が提出される背景には、合営企業に派遣されていた政府側代表の作風の誤り・能力不足に対する広範な不満が存在していた。たとえば、天津のある工商業者の発言として次のようなものがある。

政府側代表の多くは労働者から選抜され、能力は低く、ある者は企業を管理する仕事が出来ない。資本家側が政府側代表に意見を提出しても、受け入れられることは少ない。ある工場の資本家側の人員は常に政府代表に意見を提出したため、指導権を「篡奪」しようとしていると思われた。⁶

さらに、民建中央常務委員会宣教処副処長・許漢三は民主党派内部の問題として「大衆の中に『黨員を批判することはすなわち反党であり、反党はすなわち反革命である』という雰囲気⁷が形成された」と述べた。同様な雰囲気は合営企業内にも満ちていたと思われる。また上海工商連副主任・胡傑文は「ある工場の代表はすぐれた変圧器をつくり、これは表彰されるべきなのに在庫資材を流用したというので」批判されたという状況を紹介している。⁸当時の合営企業に派遣された政府側代表の中には、企業管理能力や生産性重視の視点など

を欠如した者が少なくなく、そのため民族資本家の不満を買う者も少なからずいたのである。民族資本家の側から見れば、中共の企業管理政策は合理的な発展を阻害するだけでなく、経営の停滞さえもたらしかねないものと認識されていたと言えよう。

この政府側代表の作風の誤りや能力不足に基づく不満や対立について民建広東工商改造補導処処長・王伯雄は、合営企業における政府側代表と資本家側代表との「職責を明確」にし、両者の関係を改善することによって解決すれば良いと述べた。⁹だが問題はどのように「職責を明確」にするかであり、積極的に民族資本家の企業経営への参画の保障・拡大を求める人々は、単に政府側代表の在り方を批判するだけでなく、彼らの要求の根拠を民族資本家の中国社会における位置づけそのものに即して展開する必要があつた。

この点に関して章乃器は、民族資本家の社会主義改造の進展に関して、次のように述べている。

現在、工商界はすでに五つの関所（戦争（Ⅱ）抗日戦争と国共内戦）・土地改革・（朝鮮戦争における）抗美援朝・「三反五反運動」・社会主義改造）をくぐってきた。これは身も心も入れ換える改造であり、すでに（社会主義）改造は終わった。¹⁰

したがって章乃器によれば、民族ブルジョワジーは「すでに基本的には消滅する段階にあ」り、「全業種における公私合営の段階を経て、（民族ブルジョワジーとプロレタリアー

トとの矛盾が「敵と我との対抗性の矛盾に転化する危機は完全に去った」のである。⁽¹¹⁾

この章乃器の情況把握は、八大会での中共の情勢観と基本的に一致するものであったが、彼はさらにブルジョワジーの二面性に関しても、その存続を認めながら、それは「革命」と「反革命」ではなく、「先進」と「落伍」という二面ではない、と強調した。階級の本質規定と個人の階級的性格との関連については、両者を区別する必要を説き、彼は次のように述べている。

ブルジョワ階級の搾取は生まれつきであり、死してやむというものであり、消滅させることができるだけで改造はできない。しかしながら、ブルジョワ階級分子は改造できる。なぜなら、彼の搾取は生まれつきではないからである。⁽¹²⁾

章乃器は民族資本家の積極性を引き出して生産の拡充を実現するため、以上のように社会主義建設における民族資本家の主体的位置を確認したが、それは民族資本家の自尊心を認め、その自尊心に根拠を与えるためだったと考えられる。北京市工商連主任委員・楽松生は次のように述べている。

資本家側は悦んで企業を差し出し、改造を受け入れたが、それは容易なことではない。これは身も心も入れ換えることであり、我身を切って受け入れたものである。

この点を承認しないことは、実際と適合しない。⁽¹⁴⁾
民族資本家は、自らを「改造」される客体としてではなく、

新中国のための経済建設に従事する主体と自認し、それなりのプライドを持っていたのである。

だからこそ章乃器は「工商業者に上手に働きかけるためには、必ず彼らに対して情を通わせ、彼らの苦しみに関心を払わなければならない」と述べるとともに、繰り返し民族資本家に「憂慮」「消極自卑」の思いを持たせないよう中共に要請した。彼はそれだけでなく民族資本家の「驕傲自卑」さえ容認している。

「民族資本家が」積極性を発揮すると同時に、劣等感を克服すれば、尊大になること、そしていささか「中共の政策に対して」不満を持つようになることも免れ得ず、総じて自慢し驕る気持が現れてくるだろう。……「しかしながら」積極さが、いささかの傲慢さを帯びることは、総じて消極的であることよりも良く、甚だしきに至っては、なにがしかの虚偽を帯びた「中途半端な積極性」よりも良いことに思い至らなければならない。⁽¹⁵⁾

こうした立場に立つ章乃器は、中共の商工業政策にも言及する。彼らによれば、当時における商工業者の改造とは、政治上・経済上の改造ではなく、思想・作風の方面に限定したもので良く、その方法も大衆動員による過激なものではなく、話し合いによる穏やかなものが必要であった。⁽¹⁷⁾章乃器には「三反五反運動」の再来を避けたいという気持が働いていたと思われる。

その上で、章乃器は民族資本家に積極性を発揮させるため

の方法を論じ、「資本主義の中での有益な経験と知識を社会の財産として受け継ぎ、社会主義に役立てる」ことの必要性を説いているが、そのうち彼が特に強調したのは人材の適正な配置と経営の合理化とである。すなわち彼は次のように述べた。

これは「資本主義企業の方が経済効率が良いのは」、資本家が利益を得るため、人材の選択を上手に行い、人材の育成・抜擢の面から出ただけ公平さを示すからである。このようにしなければ、彼「資本家」は他人と競争し難いのであるが、ある種の社会主義企業はこの点を実現できないでいる。……是非を明らかにし、業績に応じ、抜擢・配置がえをおこなってこそ、本当に工商業者の積極性を発揮することが出来るのであって、『徳を重んじ才を軽んじ、資本をもって徳に代える』だけでは是非を明らかにできず、「民族資本家の」積極性を発動できない⁽¹⁹⁾。

当時、有能な経営手段をもつ民族資本家や技術者が、その階級的出自ゆえに能力を充分に発揮できないという状況が広範に存在しており、章乃器は、企業の経済効率を高めるのは、「人材」であることを熟知した上で、『才能』に応じた評価を行うことが企業活性化の第一のポイントであるとしたのである。

また、章乃器は資本主義国の資本家は「一人に三人分の仕事をさせてこそ、大儲けができ、企業を上手く経営でき、こ

れに反して五人に一人分の仕事しかさせることができなかったらば、破産することを知っている」と述べ、経営合理化の必要性を説いたが、当時の中共の合営企業では、管理人員がかなり大きな比率をしめていた。たとえば公私合営上海新中電力機廠廠長・魏如によれば、彼の工場では技術者などを含む管理人員が六五〇人おり、それに対し生産労働者が九五〇人・養成工が一五〇人で約一対二の比率であった。魏如によれば、私営時は一般に一対六から一対一〇であり、日本・アメリカでは一対二〇であった⁽²²⁾。章乃器は公平で合理的な勤務評定の必要を説いているが、公私合営新安電機機廠副廠長・孫鼎は、熟練工と新人との賃金が一律に決められたことに不満を述べ、年令給制度の有効性を強調している⁽²³⁾。

「人材」や「合理性」などの重視は、自らも企業経営に携わったことのある章乃器ならではの見解だと言えるが、彼は合営企業の経営主体の一つとして民族資本家を位置づけ、彼らの「企業家精神（原語：「企業心」）」を発揮させる必要を説いていたと言えよう⁽²⁴⁾。

しかしながら、章乃器は社会主義そのものを否定したのではなかった。彼の中共批判は、セクト主義・官僚主義・主観主義に限定されていた。章乃器は中共の指導に関しても、それを承認した上で、指導と被指導との関係を、演劇における演出家（中共）と役者（民族資本家）との関係にたとえ、より高度な指導の在り方の確立を求めたのである。彼は「集中の一面を強調して民主の面を軽んじ、一つのグループを育て、

その他の意見の異なる人びとやグループを圧倒し、道理を講じて是非を明らかにする姿勢を堅持せず、そのためにいささか独裁的で家父長的な作風を増長してきた」中共の統一戦線政策を批判したのであった。⁽²⁵⁾つまり、章乃器は中共に対してグラムシのいう「知的・道徳的・政治的指導権」の確立を求めたのであって、中共の存在を否定したわけではなかった。⁽²⁶⁾また、「反右派闘争」では資本主義を復活させようとしたと批判されたが、彼は明確に社会主義的企業の優位性を前提に発言していた。

社会主義的な企業・機関は、『三書』（IIセクトク主義・官僚主義・主観主義）を肅清するだけで、標準的な社会主義的な企業・機関になる。そうすれば計画性（原語：整体性）を重視するけれども、労働者が主人公になることによって積極性が発揮され、各单位（II企業・機関）の工作效率は資本主義企業を超えることができる。すなわち計画性は、生産と経営上の無政府状態を回避することで、資本主義国家に比べて幾数倍から何十倍にも経済を発展させるだろう。⁽²⁷⁾

要するに、章乃器は現行の社会主義経済体制を否定したのではなく、むしろ中共の社会主義建設を効率よく発展させるために、現状批判を展開したにすぎない。そこには中国経済の発展を最大の目的として言論活動を行った章乃器の立場が色濃く反映しているといえ、政治的多元主義を主張した章伯鈞や羅隆基らとの違いが鮮明に現れている。⁽²⁸⁾

しかしながら、彼自身も党内の一部からの批判は覚悟の上だったようで、『あえて』発言を続けたかの感がある。その彼を支えていたのは、中国の発展のためには、必要な批判は行うべきだという彼なりの愛国心に基づく責任感であり、さらに「中国民族ブルジョワジーは愛国的であり、それは国民経済の回復と社会主義建設において、みな一定の積極的な働きをなし得たのであって、本来愛国的な階級が、今になって造反するとは考えがたい」という民族ブルジョワジーが保持したナショナリズムへの自信・信頼であった。また、「プロレタリアートの立場にしっかりと立っているか否かは、形式主義的な言葉使用のうわべから判断する問題ではなく、かならず動機と効果に深く立ち入って検査しなければならぬ」というプラグマティックな彼の発想法も、積極的な批判活動の展開に影響を与えていたと思われる。⁽²⁹⁾彼は中共を賛美する「形式的な言葉」を並べることで、満足するわけにはいかなかったのであり、「効果」をあげるために活動したのである。

なお、当時、中共内部において章乃器の見解に対応する統一戦線理論が提示されていたことにも注意を払う必要がある。張執一は一九五七年三月三日に次のように述べて民族ブルジョワジーとの統一戦線の重要性を指摘した。

人民民主統一戦線の問題は実質上、中国の労働人民とブルジョワジーとが連盟をうちたてる問題である。すなわち中国民族ブルジョワジーの人民民主統一戦線への参加を勝ちとる問題である。……中国共産党の各民主党派

に対する指導は共産党の総路線と各種の政策・方針および共産党員の辛抱強い説得・教育と模範的な行為を通じて実現する。……〔指導の方法とは、党の〕組織によって支配したり、少数を多数に服従するよう強制したり、脅迫や命令によってことをなすことでは絶対でない。さらには共産党の各組織や、あるいは共産党員各個人が自らを指導者と思ひ、その立場から任意に号令を發し、命令を行うことでも絶対でない。……もし我々がこの方面で大きな誤りを犯したならば、指導は強固にならず、甚だしい場合は失われてしまう。⁽²²⁾

- 註 1) 「人民日報」一九五七年五月二日(以下、一九五七年に發行された新聞・雑誌に関しては、年号を省略した)。
- (2) 前掲「中共人民内部の矛盾と整風運動」(第四「運動經過一覽表」)一七四〜二二八頁参照。
- (3) 章乃器「關於工商改造輔導工作的幾個問題」(「大公報」六月九日)。
- (4) 「光明日報」五月一七日。
- (5) 上海工商連副秘書長・吳志超の發言(北京放送・五月九日)(前掲「中共人民内部の矛盾と整風運動」一三六頁)。
- (6) 「光明日報」五月二日。
- (7) 「光明日報」五月一九日。
- (8) 前掲「中共人民内部の矛盾と整風運動」一三六頁。
- (9) 「人民日報」五月二三日。
- (10) 「人民日報」五月九日。
- (11) 章乃器「關於中国民族資産階級的兩面性問題」(「工商界」一九五七年六期)。
- (12) 同右。
- (13) 「人民日報」六月二日。
- (14) 「光明日報」五月一七日。
- (15) 「大公報」六月一日。
- (16) 前掲「關於中国民族資産階級的兩面性問題」。
- (17) 前掲「關於工商改造輔導工作的幾個問題」および前掲「關於中国民族資産階級的兩面性問題」。
- (18) 前掲「關於工商改造輔導工作的幾個問題」。
- (19) 「人民日報」六月二日。
- (20) 上海公私合營三英電業廠廠長・朱松齡「私方技術人員的苦悶」および公私合營北京義利食品公司副經理・兒家璽「信任不足、使用不當、支持不力、関心不够」(「工商界」一九五七年六期)。
- (21) 前掲「關於工商改造輔導工作的幾個問題」。
- (22) 「徹底敞開、幫助共産党除「三害」」(「工商界」一九五七年六期)。
- (23) 同右。
- (24) 前掲「關於工商改造輔導工作的幾個問題」。
- (25) 章乃器「從「牆」和「溝」的思想基礎說起」(「人民日報」五月四日)。
- (26) グラムシ「イタリアにおける国民と近代国家の形成と発展の上での政治指導の問題」(「グラムシ選集」二卷、合同出版、一九六二年)および犬丸義一「婦人労働者の歴史的国民的地位」(犬丸ほか編「講座現代の婦人労働」四卷、

労働旬報社、一九七八年）参照。

(27) 前掲「関于工商改造輔導工作的幾個問題」。

(28) 章伯鈞や羅隆基らの活動については、前掲平野「中国革命の知識人」(六章)「整風運動と統一戦線の消滅」(二二〇)〜二八六頁参照。

(29) 章乃器はすでに一九四九年の時期、商工業者は中共の左傾の誤りに関しては対応が鈍い、左傾の誤りは直接的には商工業者にダメージを与えるにもかかわらず、彼らは共産党の圧迫を恐れ積極的に発言しない、しかし商工業者は「積極的に自己の意見を提出し、積極的に国家の情勢を管理する。そうしてや々と新国家の主人に似つかわしくなる」と述べ、愛国的であるためには、中共の誤りに対しても積極的に批判する必要を説いていた(「平津工商業的新生」(「章乃器」論中国経済的改造)五〇年代出版社、一九五一年、原載:「北京人民日報」一九四九年五月二六日)。彼は政府の誤りや不十分な点に対して批判する責任を持つことを自らに課していたが、それは彼なりに自己のナショナルリズムを現す方法の一つであったと思われる。

(30) 前掲「関于中国民族資産階級の両面性問題」。

(31) 前掲「関于工商改造輔導工作的幾個問題」。

(32) 張執一「関于人民民主統一戦線の幾個問題」(「大公報」三月三一日)。

三 章乃器と工商連および民主建国会

章乃器は民族資本家に「鳴放」を呼びかけるにあたって、「今後、民建と工商連は商工界の状況があるがままに反映し、あわせてあえて『鳴放』した人が打撃や報復を受けないよう完全な保障を与える必要がある」と述べた。

ところが、「工商連の積極分子は群衆から離脱し、工商連は党と政府が作り出したものである」との不信感が表明され、「工商連の指導には、左になるとも右になることなかれ」という作風が相当普遍的に存在しており、……多くの商工業者は工商連に行くことを願わない。なぜなら、問題が解決せず、態度が良くないからであり、他の人が(「工商連の」門をくぐろうとしないのも無理はない)と言われていた。

それだけでなく、工商連内部では生活に困窮した中下層が労働組合への参加を希望するような情況も生まれていた。因みに「国家が毎年定額利息として支払う金額は一億二千万円、定額利息を受けとる株主は二一四万人に及んだ。一人当りにすると(「年」平均一〇五元にすぎ)ず、零細な商工業者の多くは、労働者に比べて賃金が低いと言われる情況であった。まさに北京市工商連副主任委員・李胎賛の言うように、工商連内部において「上層の商工業者が名誉や地位に血道をあげ、中下層の商工業者は生活の困難を愁いていた」のである。

とすれば、工商連が「鳴放」した民族資本家を政治的に守

ろうとすれば、幹部が中共に対して相対的に独自の立場をとるだけでなく、中共への圧力団体たりうるよう工商連の組織力を強化するなど、何らかの手立てをつくす必要があった。

少なくとも工商連の指導的幹部の一人であり、「鳴放」した人びとの安全を「完全に保障」する必要を説いた章乃器には、工商連を単なる中共の商工業者再編の道具にとどまらない、「工商界の状況があるがままに反映」することができる組織に改革する任務が課せられていたはずであり、工商連の内部矛盾を解決する必要もあつたと言える。

しかしながら、章乃器は商工業界内部の矛盾については、ただ「高賃金の人はけつして多くはなく、多くの人は労働者に比べて低賃金である」、「目前の状況から言えば、商工業改造の補導工作における正確な大衆的観点とは、商工業者、特に中下層の苦しみに関心を持ち、生活面での問題と工作面での問題とを統一することである」と述べるにとどまり、工商連の組織力を高める具体的な方策を明らかにしていない。

また、民建に関しても、「私は民主党派の工作に興味をもつていない。民主建国会に参加したが嫌気がさし何回か退きたいと考えた」と述べており、「〔章乃器は〕章〔伯鈞〕羅〔隆基〕のグループからは同調をもとめられたが、努めてこれを回避した形跡がある」と推測されたことをあわせ考えると、彼が民建を中共に対する圧力団体として機能させるために積極的な組織活動を行ったとは考えがたい。⁹⁾

だが、工商連がもともと中共が組織した商工業者の結集体

であること、またすでに民建が中共の指導を受け入れることを決定し、組織的な改革を受けていたことなどを考えると、章乃器がこれらの団体を中共に対する圧力団体へと改造できなかったのは、やむをえなかつたとも言え、当時の政治情勢を無視して、章乃器を責めるわけにはゆかないであろう。

しかしながら、章乃器が自らの発言を現実化しえなかつた要因は、単に政治的な力関係だけにあつたのではないと思われる。彼は政治制度に関してはほとんど言及しておらず、わずかに触れた場合でも次のように述べ、現行の組織の改変ではなく、その充実をもとめていたに過ぎなかつた。

少なからぬ〔中共〕黨員が国家機構の役割に対して、まだ充分な認識を持つておらず、国家機構は党が革命を進め、社会主義を建設する武器であることを充分認識していない。このため、国家行政機構が十分に運用されていないだけでなく、国家権力機構もまた十分に重視されていない——すなわち県以下の人民代表大会の開会は不¹⁰⁾正常で充実していないという情況が¹¹⁾厳然と存在している。

だが、経済活動の活性化のためには、当時の中国においても政治制度の改革を射程に入れざるを得なかつたはずである。章乃器は政治制度の民主化に関して羅隆基や章伯鈞らのように自らの展望を示しておらず、この点に彼の特徴の一つがあつたと思われる。

つまり、彼は政治的な民主化を体系的に論ぜず、現実の政

治制度を承認したうえで「鳴放」したのであって、章乃器にとつて「鳴放」とは民主化運動ではなく、中共の呼びかけに応じた意見提出に過ぎなかつたのである。それゆえ章乃器は「鳴放」した知識人を中共の攻撃から守る必要性を論じながらも、それを実行するための運動論——民建や工商連の改革などの具体的方策——を提示できなかった。その結果、中共が当時示した民主化実現の可能性に依拠するしか、章乃器には「言者無罪」を保障する道は残されていなかつた。

註(1) 「人民日報」五月一二日。

(2) 公私合営上連電工器材廠經理・史慕康の發言（前掲「徹底敞開、幫助共產黨除『三害』」）。

(3) 「光明日報」五月一七日。

(4) 天津工商連副秘書長・田玉璞の發言「人民日報」五月一七日。

(5) 前掲「現代中国の歴史」一〇五頁。

(6) 「人民日報」五月一六日。

(7) 「大公報」六月一日および前掲「関于工商改造輔導工作的幾個問題」。

(8) 章乃器「我的檢討」（「人民日報」七月二六日）。

(9) 前掲「中共人民内部の矛盾と整風運動」七八頁。

(10) 確かに、中国民主建国会・中華全国工商業連合会宣伝教育処編「右派分子章乃器の丑惡面貌」（工商月刊社、一九五七年）には黄涼塵「章乃器在民建内組織反党小集团的陰謀活動」が掲載されており、彼が民建内部で分派活動を行

ったことを、彼の「右派分子」としての罪状の一つとしている。しかし、この論文は民建内部に対立があり、章乃器の支持者がいたことを明らかにしているが、彼らが民建内部で明確な組織方針をもつた分派活動を行ったことを実証しているとは思えない。

(11) 工商連・民建の変化の概略に関しては、さしあたり「人民手冊」の一九五二・一九五三年版などを参照のこと。

(12) 前掲「從『牆』和『溝』的思想基礎説起」。

(13) 前掲田中「一九五〇年代中国における社会主義と自由」参照。

四 結語——章乃器批判の歴史的意味

予想外の「鳴放」の展開に直面して、中共は一九五六年のスターリン批判につづく東欧の民主化運動（特にハンガリー事件）が、中国に波及することを恐れ、当時の経済混乱が党と知識人との「溝」だけでなく、労働大衆との「溝」をも深めているとの認識も手伝って「反右派闘争」を發動した。だが、民族資本家をめぐる問題に即して考えた時、章乃器への批判がなぜ必要とされたのであろうか。また、その批判はいかなる意味をもつたのだろうか。

章乃器は建国直前から民族資本家の「知識と経験」を中国の経済建設に役立てる必要性を説き、中共の誤りにより経済建設に損害がもたらされたり、商工業者が苦痛を感じる可能

性を指摘しながらも、「全般的に計画経済と国営経済の強力な指導は、絶対に必要である」と述べており、建国から「鳴放」期に至るまで一貫して、社会主義経済の優位性の承認を前提に言論活動を展開していた。彼はこの前提を踏まえ、民族資本家の経営能力を尊重し、中共の商工業政策に対する無謬性を否定したのである。

それゆえ、「鳴放」期の章乃器は民族資本家のオピニオン・リーダーとして活動したが、彼の意見は他の民族資本家の見解と比べた時、決して過激ではなかった。例えば榮子正（天津市工商連常任委員）はマルクス・レーニン主義は中国に適合しないと考えたが、章乃器はマルクス・レーニン主義を否定していない。また吳志超（上海工商連副秘書長）などは合営企業から政府側代表を撤退させるよう要求したが、章乃器は政府側代表の退出は求めていない。さらに「鳴放」で大いに論議された「定息」問題に関しても、章乃器はそれをブルジョワジーの搾取と見なすことには消極的だったが、当時民族資本家の一部にあった「定息」支払いの延長要求には同調していない。あくまで、彼は社会主義体制を擁護し、社会主義中国の発展を目指すという立場から言論活動を展開したのである。

にもかかわらず、章乃器に対する批判は広範に展開され、彼の一九三〇年代における「罪状」まで指弾され、彼は資本主義を復活しようとしたと批判されることになった。こうした批判の直接的な要因は次の魯沂の指摘からうかがえるよう

に思われる。

幾人かの商工業者は確かに一時彼によって迷わされた。彼の言論の影響のもと、何人かの人びとは一層傲慢になり、改造をゆるめ、マルクス・レーニン主義は中国に適合せず、教条的であると考えた。甚だしきに至っては、講習班のメンバーの数人は全く学習に参加しなくなり、幾人かの人びとは、工商界を改めて批評する人は（民族資本家の）積極性に打撃を与える者であり、階級関係の存在を改めて提起する人は民族資本家を圧迫する者である、と考えた。ある者は企業中の政府側代表の指導を否認し、ひどい者になると政府側代表の撤退をもとめさえした。さらに「定息は光栄あるものであり、合理的」であると考え、数年多く受け取ることを要求する者もいた。またある者は「五反」での裁判を覆すよう求め、ある者は資本主義的な経営方法の復活を要求するなどした。……（このため）大混乱になった。⁽⁷⁾

章乃器は「大混乱」という情勢、すなわち商工業者の「（中共への）不満」「尊大さ」「驕傲さ」の噴出という情況は、彼らの積極性を高めるために必要なものだ肯定していたのであり、中共の指導性は「彼ら（＝商工業者）が仕事の上で成功を得るように（中共が）力を尽くして援助する」ことで実現し、保障されると考えていた。また、魯沂が紹介している商工業者の行動が、直接的に資本主義を復活することになるとは思えず、先に触れたように魯沂が批判した見解には章乃

器の発言の限界を超えるものも含まれていた。

しかしながら、中共は章乃器の言論活動を中共の商工業政策の枠を超えて、商工業の再編成へと連なるものと位置づけ、榮子正らのラディカルな中共批判の責任を章乃器に負わせたと考えられよう。この点に中共の自らの指導性に対する「独善性」が端的に示されており、章乃器は「生贖の羊」にされたとと言える。

中共が章乃器の言論活動に対して大きな危機感を抱いたことは、前掲「右派分子章乃器の醜惡な顔貌」に黃涼塵「章乃器が民建内部において反党小集団を組織した陰謀的活動」や袁松亭「章乃器が小商人や行商人へ放った毒素」が掲載されていることからうかがえる。彼の言論は商工業者の上層から下層に至るまで影響を与えたとされ、彼への批判は民建・工商連という商工業者の団体を舞台に展開されたのである。

中共は章乃器を「右派分子」と断罪することで、彼が求めた新しいグラムシ流の指導の在り方を確立しえず、「人民民主統一戦線」の「実質問題」（「民族ブルジョワジーの人民民主統一戦線への参加を勝ちとる問題」）をも充分に実現することができなかつたと言える。それは実際的には、民族資本家の積極性の發揮を妨げ、主として合営企業に担われた軽工業部門における消費物資の生産増大という経済上の重要問題を解決する方策の一つを失ったと言えよう。この後、中共は「反右派闘争」を展開しつつ「大躍進」を推し進め、経済を混乱させた。その後の調整期を経て開始された文革の時期に

においても経済は大いに混乱し、中国経済は国際的にもたち遅れることになった。

そこで、周知のように一九七八年以後中国では経済改革が進められることになったが、経営上における改革の骨子は、① 企業自主権の拡大と経済責任制の採用、すなわち、自主的生産権・販売権・価格決定権などの承認、工場長責任制の確立、破産法制定など、

② 計画管理体制の改革、すなわち市場経済の導入など、の二点にある。

この改革の重要な目的が資本主義企業の経営方法を学ぶこと、つまりシラム氏の言うように「企業家精神の促進であった」とするならば、それは章乃器が「鳴放」期に繰り返したことであった。彼の見解は、彼の死後、ようやく中共によって認められ受け継がれたのである。

註1) 前掲田中「一九五〇年代中国における社会主義と自由」

参照。

(2) 章乃器「経済的改造——消腫、去腐、生新」(原載:「新建設」二卷八期、一九五〇年)〔前掲「論中国経済的改造」〕。

(3) 章乃器「新民主主義的民族工商業家底任務——一九四九年九月二三日在中国人民政治協商會議大会上的發言」(前掲「論中国経済的改造」)。

(4) 「人民日報」六月二七日。

(5) 「人民日報」五月二二日。

- (6) 芸華楽器廠工場長・張煥堯の発言「光明日報」五月一日など。なお、章乃器の「定息」に関する見解は、前掲「関于工商改造輔導工作的幾個問題」を参照のこと。彼は、「定息」は民族資本家個人に則して言えば「不勞所得」であり、階級の観点から見れば、搾取の残滓である、と捉えていた。
- (7) 魯沂「工商界反右派問答」「工商界」一九五七年七期。
- (8) 前掲「関于工商改造輔導工作的幾個問題」。
- (9) 山内一男「中國經濟近代化への模索と展望」(前掲「岩波講座現代中国」二卷)。
- (10) シュラム著・矢吹晋訳「改革期中国のイデオロギーと政策一九七八〜八七」(蒼蒼社、一九八七年)一一一頁、また中国の歴史学界においても、この点は重視されているようである。徐鼎新「民族資本企業経営管理經驗初探」(「社会科学」一九八〇年三期)、「復印報刊資料經濟史」一九八〇年一三期)や熊甫「論中国民族資本企業的「企業精神」」(「四川大学学報(哲社版)」一九八八年四期)、「復印報刊資料經濟史」一九八九年一期)などの研究が発表されている。

(広島大学文学部)

**Chang Nai-ch'i[章乃器]'s criticism and his frustration in 1950's
—from “The Hundred Flowers Campaign” to
“The Anti-Rightist Campaign”—**

by Nobuo Mizuha

In May, 1957, a lot of intellectuals began to claim for democracy eagerly and these are called “The Hundred Flowers Campaign”. This campaign arose in order to answer a demand by China Communist Party (CCP). In June, however, the situation was quite changed; Some intellectuals, who condemned CCP, was oppressed strictly as “Rightist” by CCP (“The Anti-Rightist Campaign”).

Generally speaking, as it has been said that the analysis of this process would reveal one of the characteristic of contemporary China, so a lot of studies about it has done. Most of them, however, has only taken the focus on making clear the factor of change in

CCP. And even in case of analyzing the intellectuals who asked for democracy, they concentrated all the interests on discussion of their political reform.

Therefore, I chose Chang Na-ch'i [章乃器] in this thesis, who spoke about businessmen in 1957. (Chang Nai-ch'i [1897~1977]; he was Vice chairman of All China Federation of Industry and Commerce, Minister of Food, Vice chairman of Democratic National Consultive Association.... and so on.) When I wrote it, I emphasized next three point; (1) background of Chang Nai-ch'i's criticism and its characteristic, (2) limit of his activity and its cause, (3) historical meaning of CCP's criticism for him.